

トップ東日本コース報告

開講式(学院記念館)



第40回労働リーダーシップ東日本コースは、2006年11月13日(月)～25日(土)まで、加盟単組から9名が参加し、開講した。受講生は、前半は、都内白金台にある明治学院大学キャンパスで講義・ケーススタディ・現地スタディを通じて、労働者を取りまく環境の変化について学ぶと共に、後半では、軽井沢に合宿して、労組の対応について考察した。また、ゼミを通して、組合と職場で抱える課題解決に向けて熱心な議論を行った。

清家氏講義風景



▼第1週目
1週目(11月13～17日)は、通学形式(遠方の受講生は宿泊)で、東京・白金台の明治学院大学のキャンパスで、「人口減社会への対応」(清家篤慶大教授)、「グローバルな企業展開と労使の役割」(矢野弘典中日本高速道路(株)会長)、「コーポレートガバナンスとCSR」(大平浩二明学教授、原強上智大学教授)を学ぶと共に、「新たな時代の労働運動の課題」(加藤裕治金属労協議長)、「グローバル化への労働組合の対応」(小島正剛金属労協顧問)、

国会見学



『ワーク・ライフ・バランスを考える』(丸山浩典厚労省)、実践を含めた『組合戦略づくりに』(神田良明学教授)を学んだ。
一日お江戸探訪「日本の政治と経済の中心を体感」
その間の11月16日は、初の試みとして特別プログラム「日お江戸探訪『日本の政治と経済の中心を体感』を実施した。国会議事堂を見学すると共に、参議院会館で金属労協政治顧問の若林秀樹参議院議員(当時)から「希望立国、ニッポンへ」と題して講演を

受けた。その後、日本橋に移動して、金属労協本部で、團野事務局長から「金属労協の活動」について懇談の話を



東京証券取引所でシュミレーションにチャレンジ



東京証券取引所見学

第40回労働リーダーシップ

サンコン氏講演



一日討論風景



聞いた後、東京証券取引所を見学し、株投資のシミュレーションにもチャレンジした。再び金属労協本部に戻り、「財務諸表から見た伸びる会社」(石井康彦高千穂大助教授)の講義を受けた。

▼第2週目

2週目(11月21~25日)は、軽井沢プリンスホテルで、全員合宿形式で、ゼミナールを中心に研修に励んだ。初日の21日には、ゼミナールの後、

ギニア日本交流協会顧問のオスマン・サンコン氏を講師に迎え、特別講演「大地の教え」を受けた。終了後に、サンコン氏、ゼミ担当講師も交えてスポーツ交流「ボウリング大会」を行い、交流を深めた。

一日討論『日本の雇用について考えよう』

2日目の22日には、特別プログラムとして一日討論『日本の雇用を考えよう』を昨年

に引き続き行った。最初に、経営側から東京経営者協会の大久保力専務理事、労働組合側から大福真由美電機連合副委員長、経済学者の立場で佐野嘉秀東京大学客員助教から、それぞれ、日本の雇用についての課題提起を受けた後、全体討論を行い、非典型労働の増加など雇用形態の多様化に伴う職場での課題などについて講師も交えて活発な討論を行った。

ゼミ総括発表

受講生は、各自が持ち寄った「労働組合で現在抱えている課題」について、二つのゼミに分かれて、計5回にわたるゼミでの議論を通じて、課題を整理し課題解決への道筋を探った。

最終日24日には、ゼミ総括発表を行い、全受講生が、2週間のゼミナール通じて各自の組合・職場での課題につい

て議論・研究してまとめた成果を発表した。総括発表には、加盟産別から4名の産別役員(自動車連連・山本事務局次長、電機連合・石村書記次長、基幹労連・神津事務局長、全電線・海老ヶ瀬副書記長)も出席、受講生の総括発表に熱心に耳を傾け、激励のコメントを受けた。

◎受講生のレポートテーマは以下の通り



ゼミ総括発表

ゼミナール担当講師のコメント

●労働リーダーシップ東日本コース運営委員長/明治学院大学経済学部教授

大平 浩二 おおひら・こうじ



『前例』を打ち破ることが今最も大切な点

第40回労働リーダーシップコースが2006年11月13日から24日にかけて、明治学院大学と軽井沢プリンスホテルを会場に開催された。

今回は、9名の参加者があったが、記念すべき40回目という節目でもあり、名実共に上級コースに相応しい研修であった。最近の労働組合を取り巻く状況は、一部に景気回復の兆しがあるものの、労組が抱える問題はより一層多様化しているように見受けられる。たとえば、職場におけるパート・アルバイト等の従業員問題や、他社とのM&A等による新しい組織変化に伴う様々な混乱と課題、そしてまた近年のリストラによる過重労働や利益なき繁忙等々といった諸問題である。これから労組が真剣に取り組まねばならない諸課題であろう。

また、組織率の低迷等も含めて、これからの新しい労働組合の将来像はいかなるものであるのかについても熱心な議論がなされた。労働組合が所属会社の株主となり、ガバナンス機能を発揮する必要があるといった点についても真剣な議論がなされたのもその一つであろう。確実に、労組も変わらなければならない時がきているように思われた。

2007年4月27日には40周年を記念するシンポジウムが開催され、このリーダーシップコースの生みの親でもある、明治学院大学名誉教授で元学長の金井 信一郎 氏の基調講演「労働リーダーシップコース創設に想う」では、労働リーダーシップコースの創設前後の経緯と創設の趣旨、当時の労働者教育の状況や開始当時のエピソードなど貴重な話が紹介された。

また、引き続きNHK エグゼクティブ・プロデューサーの今井彰氏による記念講演「プロジェクトXへの挑戦」では、ビクターをはじめとする当時の日本のものづくり企業の世界的な技術開発の苦勞を『プロジェクトX』の

制作秘話を交えながら紹介され、新たな感動を参加者に与えた。金属産業という“ものづくり”に関わる参加者にとって大変思い出に残る講演であった。その後八芳園に会場を移し40周年記念レセプションが開催された。

また今年8月には、この40回コースのフォローアップ研修会が北海道で開催される。前回の名古屋の三菱重工に続き、現地での見学等を組み入れた参加型の研修である。大いに期待したいところである。最後に、本コースの講義をご担当の先生方、またいつもながら本コースの遂行に直接ご尽力いただいているIMF-JCの若松次長はじめ、渡辺部長ならびに上口主任に心より御礼申し上げます。



大平ゼミ風景

●「労働時間の適正な管理に向けて」(DOWA労働組合連合会・金子将司)、●「長時間労働への対応」(日立電線労組日高支部・中野晋男)、●「組合づくり」(三菱重工労組名古屋冷熱支部・平野邦弘)、●「販売代理店の組合づくり」(スズキ関連労働組合連合会・桑野昇)、●「組織強化活動について」(富士重工労組・宮城俊一)、●「効果的な組合活動の実践」(三菱重工労組

本社支部・佐野雅英)、●「コミュニケーション強化策」(全本田労連・松島亮介)、●「会社を元気にする活動」(バイオニア労組川越支部・中島正行)、●「労働市場の変化に対応した新たな組合活動の創造」(三洋電機労組コーポレート支部・坂本俊哉)

閉講式

閉講式では、加藤議長が挨拶に

立ち、2週間の受講生の研鑽の勞をねぎらうと共に、今後の活躍を期待した。加藤議長から全受講生に修了証が授与された。運営委員の大平運営委員長、神田運営委員、石井運営委員の先生方から餞の挨拶があり、最後に受講生を代表して、今回学生長を務めたDOWA労連の金子将司さんが答辞を行い、終了した。



閉講式・全員で記念撮影(軽井沢プリンスホテル)

ゼミナール担当講師のコメント

●労働リーダーシップ東日本コース運営委員／高千穂大学商学部助教授

石井康彦 いしい・やすひこ

様々な課題解決に有益な議論の場

今回の労働リーダーシップ東日本コースでは、国会議事堂と証券取引所を訪ねるフィールド・トリップがあったり、オスマン・サンコン氏の講演があったり等々、第39回にはなかった新しい試みがいくつかあった。受講生諸氏もそうであったと期待したいが、私自身にとっては大変興味深いものであった。これは、計画・運営に多くの時間と労力を割き、努力してくださったIMF-JC組織総務局の方々のおかげである。お礼を申し上げたい。

今回参加したある受講生は、非正社員を組合員にすべきなのか、真剣に悩み、彼らを組合員として受け入れるという目標設定をし、そのための方策を提示した。またある受講生は、技術者の育成と職場の確保を、企業の枠を超えてでも何とか解決したいと心から望み、その解決策を提示した。

受講生諸氏は、それぞれが抱えている具体的な課題は様々であった。しかしゼミナールで議論してみると、彼らは労働組合の果たすべき役割が何であるかということについて、それほど異なる意見を持っていることが分かった。目的が共有されていれば、それぞれが直面している課題解決に向けての議論や意見交換は有益である。ゼミの大半は、こうした議論や意見交換に費やされた。受講生相互の意見交換を通じて得られるものは、講義を通じて得られるものとは比べられないほどに大きなものであったことを期待したい。



石井ゼミ風景

私自身、こうした場に同席させていただいて、多くを学ばせてもらった。参加していただいた受講生諸氏に感謝したい。もうすぐフォローアップ研修が開催される予定である。彼らの悩みぬいてつくった解決策はその後どうなったであろうか。報告が楽しみである。



ゼミナール担当講師のコメント

●労働リーダーシップコース運営委員／明治学院大学経済学部教授

神田良 かんた・まこと

変革型リーダーの思考・行動を学ぶ場に

リーダーの役割は、自分の率いるチームがその課題を達成することを確保することである。リーダーシップ論では、このためには、仕事を構造化することと、人間関係を良好にするように配慮する行動をとることが必須であると考えられている。労働組合のリーダーは、一般的には人間関係づくりでは一日の長があると思われる。そのため、このコースでは、仕事の構造化に焦点を当てたプログラムになっている。なかでも、従来の考え方では達成できないであろう課題を探し出し、新たな視点で課題を捉え直して、解決策を考え、実践に移していくことをプログラムの目標としてきた。この意味で、組合員が考えていない、または意識していない問題を把握して、それを自分および労働組合の仕事として構造化することが、リーダーとして求められる不可欠の役割であると考えた。変革型リーダーの思考・行動を学ぶ場にするという志を具体化したものである。もちろん、すべての組合役員がこの種のリーダーになることは望めないであろうし、望むべきでもないと思われる。自ずと、少数の組合役員に求められるものであろう。今回も、意図したか否かにかかわらず、結果的に少数の参加者であった。

参加者は自分が捉えた問題に、2週間という短期間であったが、様々な視点から検討を加えて、苦勞の末、解決策を考案した。それはいずれもが、すばらしいものであった。とはいえ、解決策はあくまでも机上のものである。むしろ、机の上のものであることが理想的な解決策を出すための必要条件であるとも言える。問題は、実際にそれを実行に移して、経験を通してより堅固な解決策へと昇華させていくことである。事実、参加者は半年間、自分の解決策を実践に移してみ、それをフォローアップ研修で再度検討することになる。この実践的な自省こそが、彼らをもう一皮むけさせ、真のリーダーへともう一步踏み出させることになる。

40年にわたって、小さくても着実に蒔き続けてきたこうした「人の種」が、これからもIMF-JCの発展に貢献していくことを望んでやまない。



受講生代表コメント

●パイオニア労働組合川越支部書記長
中島正行 なかじま・まさゆき



『何もかもが新鮮な体験』 フォローアップ研修が楽しみ

節目の第40回労働リーダーシップ東日本コースに参加することになったのは、本部書記長から誘いを受け、JCのHPを閲覧したのがきっかけでした。研修期間2週間は正直不安でしたが、コース内容に興味を引かれたことと経験者からの薦めもあって、思い切って受講することに決めました。そして2006年11月、期待と不安の入り混じる中、明治学院大学キャンパスでスタートを切りました。1週目の目玉は、各分野の権威の方を講師に招いての講義でした。様々な観点から見た労働組合が抱える課題と今後についての話があり、「そんな見方があったのか」という驚きと新鮮さが強く印象に残りました。また40回記念初の試みとして「1日お江戸探訪」と題して、国会や東京証券取引所などを見学して回り、大変充実した1週間となりました。

2週目は場所を軽井沢プリンスに移し、明治学院大学の大平先生と高千穂大学の石井先生の指導の下、ゼミを中心に行われました。参加者それぞれの労組が抱える課題やその解決策について、ディスカッション形式でゼミが進み、みんなで知恵を出し合いながら道筋を探っていきました。またオスマン・サンコン氏の特別講演とボーリング大会交流もあり、本当にあっという間に時間が過ぎていきました。

最終日、2週間の総仕上げとしてゼミで討論した各人のテーマを総括発表する日がやってきました。これまでに得た知識と体験を元に、それぞれが自信を持って発表に臨みました。今でも鮮明に覚えているのは発表し終わった後の充実感と、この発表内容を如何に今後の組合活動の中で実践していくか、というやり甲斐と責任を感じたことでした。2007年8月にはフォローアップ研修が開催されます。この9カ月間で、参加者の皆がどの様に課題解決を実践してきたのか、話を聞くのが今からとても楽しみです。

最後に、お世話になった全ての皆様に深く感謝を申し上げます。このような貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。



小島顧問による講義（明治学院大学）



組合戦略論の講義風景



組合戦略論の実習風景

受講生代表コメント

●スズキ労連事務局次長

桑野 昇 くわの・のぼる

『熱き思い』を持ったすばらしい仲間との切磋琢磨の場



当コースは、昨年11月13日（月）明治学院大学記念館での開講式で始まりました。コース前半の1週間では、「少子高齢化」「ワークライフバランス」「グローバル化」などをテーマにした講義を受けたり、ゼミナールで「現在自分の組合で抱えている問題点」の共有化・整理・討議を行ったりと大変ではありましたが、20数年ぶりになるキャンパスライフを満喫することが出来ました。又、その合間には国会議事堂や東京証券取引所を見学するなど貴重な体験をすることも出来ました。

そして、コース後半の1週間では、舞台を長野県の軽井沢に移して、コテージに仲間数名と宿泊しながら講義やゼミを受けるといった合宿スタイルを経験することも出来ました。ここでのカリキュラムは、「自分の組合の問題点」の解決策を討議するゼミナールを中心として、その合間にオスマン・サンコンさんの特別講演（自然との共存を謳った「大地の教え」）や一日討論「日本の雇用について考える」などを取り入れたものでした。

そして最後のカリキュラムである、参加者全員によるゼミナール課題「自分の組合の問題解決策」の発表を経て、9名全員が無事に閉講式を迎えることが出来ました。

この2週間にわたるコースを振り返ってみると、とにかく毎日とても充実していたことが思い出されます。退屈で眠くなる時間はまったく有りませんでした。これは、講義・ゼミを担当していただいた個性豊かな講師陣、コース全般に亘ってサポートしていただいた産別、労連、単組の諸先輩方、コースの運営をしながらも懇親会・ボーリング大会などを企画していただいたJC事務局スタッフの献身的ともいえる『支え』と、一緒に当コースに参加した、自分の組合の変革に『熱き思い』を持ったすばらしい8名の仲間（お互い切磋琢磨するライバルでもあります）の『存在』が有ったおかげだと思います。

皆さん！ 本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いします。



ゼミ総括の発表



ゼミ総括に参加する受講生



コテージでの懇親会